

第11回 マックス「心のホッチキス・ストーリー」大募集
 ～毎日の生活の中で、「あなたが今、心にホッチキスしたいこと」をお寄せください～

マックス株式会社は、マックス「心のホッチキス・ストーリー」と題し、“あなたが今、心にホッチキスしたいこと”を募集します。

日々の生活の中にある、「今の幸せ」「家族の絆」「友だちとの思い出」など、いつまでも心にとどめておきたい想いや出来事などをショートストーリーにしてお寄せください。

特に優れた作品1点を『マックス・心のホッチキス大賞』とするほか、『マックス・U-18大賞』として高校生・中学生・小学生以下の各部から3点、『マックス賞』として優秀作品を5点選び、表彰します。

本企画は今回で11回目を迎えます。前回は、幅広い年齢層から13, 889作品の応募があり、「家族」や「友人」を大切に思う気持ちや、「見知らぬ人からのあたたかい親切」を綴った作品が寄せられました。

本年度もみなさまからの“いつまでも心にとどめておきたいお話”をお待ちしております。



◇ 募集期間 ◇

2020年10月1日(木)～2020年11月30日(月) 17時まで ※郵送の場合、当日消印有効

◇ 表彰 ◇

マックス・心のホッチキス大賞	1点	ギフト券5万円・マックス製文具セット
マックス・U-18大賞(高校生の部)	1点	図書カード1万円・マックス製文具セット
マックス・U-18大賞(中学生の部)	1点	図書カード1万円・マックス製文具セット
マックス・U-18大賞(小学生以下の部)	1点	図書カード1万円・マックス製文具セット
マックス賞	5点	図書カード5千円・マックス製文具セット

※マックス・U-18大賞は、18歳以下の応募作品が対象です。

◇ 受賞者 賞品 ◇
【マックス製文具セット】

○ホッチキス「Vaimo11FLAT」



○紙素材のクリップ「DELP」



○穴あけパンチ「スクーバ」



○携帯型スタイリッシュ朱肉「エスパクトライト」



○ローラー式個人情報保護スタンプ「コロレッタ」



◇マックス「心のホッチキス・ストーリー／あなたが心にとどめておきたいこと」募集要項 ◇

応募資格： どなたでもご応募いただけます。

募集内容： あなたが心にとどめておきたいことや、つないでおきたいこと。
(例えば、「今の幸せ」や「家族の絆」、「友だちとの思い出」など、どんなことでも結構です)

募集期間： 2020年10月1日(木)～2020年11月30日(月) 17時まで ※郵送は当日消印有効

応募方法： 原稿は400字程度(超過、未満可)。自作未発表作品に限ります。

応募先： 当社ウェブサイトの応募専用フォームもしくは郵送で受け付けます。

<当社ウェブサイトの場合>

https://wis.max-ltd.co.jp/enq/story11_form.html ※2020年10月1日(木) 10時より開設

<郵送の場合>

住所、氏名、年齢、性別、職業、電話番号、ペンネームを明記の上、以下の宛先までご応募ください。

〒103-0025 日本郵便株式会社 日本橋茅場町郵便局留
マックス「心のホッチキス・ストーリー」事務局 係

※今回から「日本橋茅場町郵便局」が宛先となりますので、ご注意ください。

審査発表：当社にて厳正な審査をし、入賞者には直接通知し、当社ウェブサイト上に掲載いたします。
発表は2021年2月下旬を予定しております。

著作権：応募作品の全ての著作権(著作権法第27条および第28条に定める権利を含む)は、二次利用を含め、マックス株式会社に帰属します。また、応募作品は返却致しません。なお、応募作品は、出版、映像化(映画・テレビ・DVD など)、舞台化、放送、ネット配信などの方法で利用することがあります。

応募者は応募作品を送付した時点で、当社及び当社が指定する第三者に対し、応募作品に関する著作権者人格権を行使しないことに同意したものとみなします。

◇ 第10回 マックス「心のホッチキス・ストーリー」受賞作品 ◇

【マックス・心のホッチキス大賞】 神奈川県 男性 15歳 ペンネーム:KJ さん

「お父さんはがんです。三か月持てばいい方でしょう。通院で抗がん剤治療は続けましょうか。」突然言われた。何て言われたのかよくわからなかった。わかりたくない。

退院してきた父は前より弱弱しく、ひがみ気味になっていた。抗がん剤や輸血を続けながら必死に生きている父を、どう受け入れていいのか僕は分からないまま、三か月は過ぎて行った。

「それ」が起きたのは三か月以上経った冬の夜だった。僕が洗面所で歯磨きをしていたときのことだ。父が「手を洗うからどけ」と言った。「今使っているから無理」と答えると、疲れで苛ついていた父とケンカになった。向こうが僕をはたこうとしたが、夢中になった僕は過度によけた。父の手は壁にぶつかり、血が出てきた。母が駆け付け僕と父をしかる。しかし激情した父は、僕に「出ていけ！」と騒ぎ始めた。僕は自分の部屋に駆け込むと、怒りを鎮める為に六回息を深く吐く。しかし僕は息と一緒に、一生後悔するであろう言葉を吐いてしまった。

「うっせ、死ね！」と言ってしまった。

それを聞いた父は怒り、驚き、悲しみなど様々な感情を感じただろう。そして僕を殴ろうとした。それを止めながら母は押し出すような声で言った。

「パパは前とはちがうんだよ。他の人の血を貰いながらも生きてるんだよ。」

怒りの気持ちはどこかへ抜けていった。代わりに感じたのは、罪悪感と自分に対する嫌悪だった。今僕は何と言った？ 頑張っている人に対して死ねと言わなかったか？ こんなにひどい奴がこの家にいていいわけがない。いいよ。出て行くよ。「じゃあね。」という上着を羽織って外に飛び出した。母の声が聞こえたが無視して駆け出した。

寒くはなかった。心配しているかな、とも思わなかった。ただどこか家から離れたかった。死ね、なんて言っちゃいけないのに。人を見る度に泣きそうになったが、泣いたら駄目だ、という気持ちがそれを抑えた。

一時間程だっただろうか。気付いたら家のドアの前にいた。母は叫びながら僕を抱きしめた。父は「帰って来たか。」とだけ言うとそのまま黙り込んでいた。

なんで戻って来たのかわからなかった。僕は一言も喋らずに自分の部屋で虚空を見つめてボーっとしていた。しばらくして父が入って来た。父の姿を見ると、これまでの感情が上がってきた。今度はそれを押しとどめるものはなかった。「ごめんなさい」と繰り返し泣きじゃくる僕を、父は抱きしめて言った。「ごめんな。いつも迷惑かけているのに。許してくれ。」許しを求めるのは僕のほうだ。前が見えなくなるほど泣いた。そしてこの時だけ父は父だった。僕の知っている、頼もしく、広い背中を持ち、僕の全てを分かってくれる父だった。

波が引いた後に食べたうどんは味こそわからないものの、温かったことは憶えている。

結局余命宣告から一年経って父は死んだ。最期に僕の指を握って一生懸命離すまいとしていた。今も死んだという事実が理解できない。しかしいつかは受け入れられるようになるだろう。その時の為にこの苦くて、でも父との最高の思い出を残しておきたい。

《本件に関するお問い合わせ先》マックス株式会社

総務部 IR・広報・ブランド戦略SEC TEL.03-3669-8106

報道に関するお問い合わせは、[こちら](#)まで